

新聞記事を使った授業づくり

～新聞をもっと身近に感じるために～

神戸市立岩岡中学校 校長 大内 清司
教諭 福山 未菜

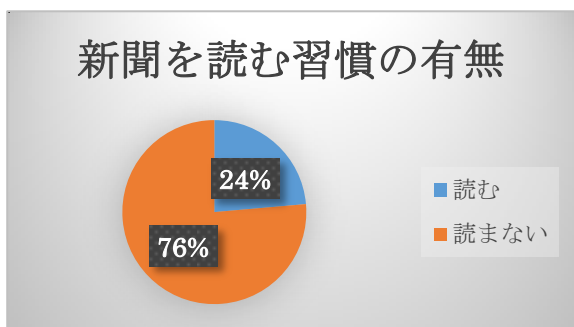
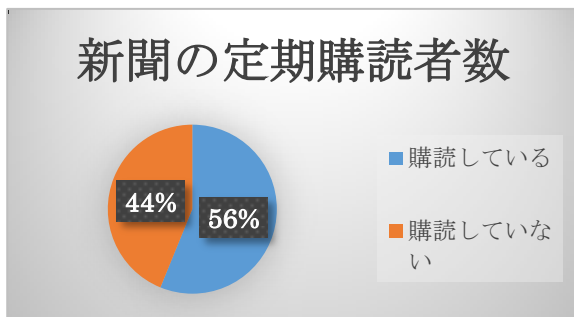
1. はじめに

本年度の、本事業の対象生徒は本校の2年生 147人。主として国語科や総合的な学習の授業で、新聞を身近なものとして捉えることができるよう、積極的に新聞を教材として活用する授業を行った。

2. 実践の概要

＜新聞に対する実態調査＞

NIEの実践を行うに当たり、事前に生徒を対象に新聞に関するアンケートを行った。その結果から、次の実態が見えてきた。



時代の流れではあるが、驚くべきことは

新聞の購読の割合が50%台であるという事実である。だから、新聞を読まない理由として「購読していないので読む機会がほとんどないから」というのもうなずける。他にも「内容が難しくて分からないから」、「興味・関心が持てないから」という理由が多かった。

また、新聞というメディアに対して、「大人が読むもの」との思い込みも強く、情報はテレビやインターネット、スマートフォンなどから入手している生徒が大半を占めた。

以上のアンケート結果より、本校2年生にとって、新聞は身近な存在であるとはいい難く、やや偏った先入観があることも分かった。また、活字というものに慣れ親しんでいない生徒も多々いる実態も分かったので、最初の取り組みとしてまずは新聞に触れる機会を少しでも増やすことを一番の目標にした。

そのために「新聞コーナー」を本館3階（2年生のフロア）の廊下に設置し、それぞれの新聞を曜日ごとに1週間ずつ設置することにした。

3. 実践の取り組み

＜新聞記事を素早く探そう！＞

①自分が探している記事を早く見つける

生徒から事前にとったアンケートによると、新聞を購入していない家庭が半分近くあることが分かった。そのため、授業で使う新聞はN I E事務局から届けられる新聞を使用した。

まず、国語の授業では、2人1組のチームを作り、各組に新聞を1部ずつ渡し、記事をどれだけ早く見つけられるかを、ゲーム感覚で行った。なお新聞は、生徒にとって一番なじみのある「神戸新聞」を使用した。新聞を机の上に置き、常に一つ折りの状態にすることでどの組も同じ条件で記事を探せるようにした。

スポーツ欄・地域欄・正平調・小説・囲碁…と、さまざまな記事を探していくうち、見つけたチームから自然と手が上がるようになった。その中で生徒が最も苦戦していた記事探しが「社説」であった。「社説ってどんな漢字ですか!?!」「何が書いてあるんですか!?!」という質問も多く出た。

幾つか問題を出すうち、「これってここを見たら分かるよ!」と、生徒自身が左上にページが書いてあること、さらに一面に記事のページがまとめて載っていることに気付き始めた。

②コラムとは？

「正平調」の記事を問題に出したとき、新聞を開いて探す生徒が大半で見つけるまでにかなり時間が掛かっていた。中には「そんなところに書かれているなんてずるい!」という生徒もいた。正平調は神戸新聞のみ記載されていること、位置は変わらないことなどを伝えると、「正平調って何ですか?」「コラムって何ですか?」などの質問が多く出た。生徒と会話をしていくうちに、朝

日新聞の「天声人語」の方が生徒に浸透していることが分かった。「短い文だけど面白い話がまとめられている」と伝えると、多くの生徒がすぐに読み始めていた。

③授業中の様子から

この授業を通して、新聞の内容を写真やイラストを見て判断している場合が多く、ページや見出しはあまり見ていないのではないかと感じた。そのため、写真やイラストの多いスポーツ欄や芸能関係はもちろん、なじみが薄い囲碁の記事でも素早く見つけることができている。しかし正平調や社説といった文字ばかりの記事になると、なかなか探し出せない。また、「新聞は難しい」という先入観を持っている生徒が多いので、長い記事になるとどうしても読み飛ばしてしまいがちであることも分かった。

一言で見出しと言っても、いろいろな種類があり、リードの部分を読めばある程度の内容がつかめる▽記事を読む順番は決まっていない▽全ての記事を読む必要はない一など、新聞の読み方を伝えた。

最後の5分間は自由に新聞記事を読む時間にしたが、多くの生徒が真剣に記事を読んでいる姿が非常に印象的だった。

<実際に新聞を作ってみよう!>

1学期に野外活動でハチ高原に行った思い出を、個人新聞で作成した。昨年度に宿泊体験学習の個人新聞を作成した経緯があり、それに引き続いての作業だったので、昨年度の優秀作品を見本として配布すると、思い出したかのように作業に夢中になる生徒が多かった。

昨年度と同様に、まずは原稿用紙にそれぞれの字数で下書きし、教員のチェックを

受けたのち清書していく手順を取った。記事の掲載場所によって字数が違うため、それぞれの思い出をどの位置に書くかに悩む生徒も多かったが、余白部分にはイラストを入れて調整するなど、工夫する生徒も増えてきた。夏休みまでかかった新聞製作だが、完成した作品は文化祭での学年展示物として、多くの方に見ていただいた。

< N I E 推進協議会新聞記者派遣 >

12月9日に、朝日新聞社の島脇健史さんが来校され、新聞の作りや記者の仕事について講演していただいた。新聞が完成するまでの過程や、記者という仕事の大変さ、大きなニュースとなった事件の裏話など、生徒も興味・関心を持って聞いていた。

島脇さんには事前に生徒が作成した野外活動の新聞を送付し、講演会でアドバイスをしていただくように依頼していた。当日は拡大コピーした代表生徒の新聞を見せながら、良いところや改善点を話していただいた。

新聞作成のとき、多くの生徒が苦戦していた「カット見出し」について、どうすれば人目を引く見出しになるのか、その際のポイントは何かなどのお話を、特に関心を持って聞いていたように感じた。



島脇さんの質問に答える生徒たち



講演会の様子



生徒作成の新聞へのアドバイス

4. 実践の感想と今後の課題

＜記者派遣講演会を受けた生徒の感想＞

- ・新聞がどのようにしてできるのかということが何となく分かったような気がした。あまり読む機会がないけど、少しだけ興味が湧いてきた。
- ・新聞記者の取材というのは思っていたよりはるかに大変であるということが分かった。そんなことを考えながら、新聞を読んでもみようかなと思った。
- ・自分が作った新聞について、良かった点や改善が必要な点をアドバイスしていただけて良かった。
- ・島脇さんの講演会を聞いて、たった30程度の新聞記事なのに、さまざまな情報があることを知り、以前よりももっとしっかりと記事を読んでいきたいと思った。
- ・自分が書いた新聞に関してのアドバイスを頂き、とてもいい経験になりました。新聞記者というのは大きな事件があったら、いつでもどこでもすぐに行かなければいけないと聞いて、本当に大変な仕事なんだなと思った。
- ・新聞記者は会社のお金で海外へ取材に行けるので、うらやましかったけど、話を聞いていると大変だと分かった。
- ・講演を聞くまでは、「取材」と聞いたら質問ばかりをして、事件などが起こるとすぐに現場に来るといふ少し嫌なイメージがあったけど、情報のために一生懸命仕事をさ

れていることが分かって、イメージが変わった。

講演の中で、新聞に書かれていることはうそではないが、それぞれの新聞社によって書き方や内容に偏りがあること、特にコラムの欄では記者の意見や感想が述べられている場合が多いことなども話していただいた。どの新聞にも同じ内容のことが書かれていると思っていた生徒も多かったようで、驚いたように見えた。

＜感想と今後の課題＞

本年度も新聞を設置してからしばらくは、多くの生徒が新聞を手に取り、記事を読む姿が見られた。しかし、昨年度と同様に時間の経過とともにその数は減少傾向にあり、最終的には特定の生徒しか読まなくなっていた。国語の授業や学年集会、朝や帰りのSTなどで、もっと積極的に新聞に興味・関心が持てるような呼び掛けが必要だったと感じている。また、大きな事件が起こった時や、話題性が高い記事が新聞に掲載された日には「今日の朝刊見た?」「今日はこんな記事が朝刊のトップだよ」などの内容紹介を継続して行うことで、生徒の関心を引き付けられると考えた。

アンケートでは、新聞に対する興味があまりうかがえなかったが、授業で質問が多く出たことや講演会の様子を見ていると、新聞に興味を持っていることが分かった。